

大友氏顕彰フォーラム in 大分報告

○事業名 令和3年度 大友氏顕彰フォーラム in 大分

○趣 旨 大友氏の顕彰活動を通して、その歴史・文化を幅広い層に広め、経済・文化・芸術・教育など、あらゆる面で「ふるさと大分の発展・活性化」に寄与することを目的とする。

○日 時 令和3年11月7日(日曜)13時00分～16時30分

○会 場 トキハ会館5階ローズの間

10月下旬からコロナ感染者が大幅減となり、ある程度の集客が期待されたが、結果は120名と振るわなかった。尤も実行委員として積極的なPR・参加要請をしなかったこともあった。それだけに来場者は自主参加で関心の高い人たちが多かったようである。

○オープニングは、顕彰会会員でもある原川二郎氏の歌謡で始まった。曲は「大分県行進曲」「大分市歌」「大友宗麟」の3曲。

○あいさつ／主催者・牧達夫顕彰会理事長、来賓は坪根伸也大分市教育委員会文化財審議監、麻生栄作県議会議員の二人。

牧理事長＝1週間前に約1万人の来場者を数え30・31日2日間の「宗麟公まつり」を終えた。その前日29日には作家赤神諒氏の講演会を開催。31日のまつりには福岡新宮町の「道雪会」のメンバーが参加、お返しに11月3日には福岡新宮町の「第1回道雪公まつり」に参加してきた。新宮町(戸次道雪)と柳川市(立花宗茂)も大河ドラマ化を目指しており、今後は大分県・大分市を含め大友氏を中心(宗麟・道雪・宗茂)に関係する市町が連携して活動していきたいと思う。

◎基調講演／「宗麟」の名で知られる大友義鎮。現在の大友史研究では第一人者の鹿毛敏夫名古屋学院大学教授の基調講演で、従来とは違った観点で義鎮像を語った。

題して「大友義鎮(宗麟)の新しい見方」。

10歳で元服し義鎮を名乗り、33歳で入道し宗麟となった。義鎮時代に西洋との交流を始め、九州6カ国の太守となり、日本国内はもとより中国大陸・東南アジア、ヨーロッパまで知

れ渡った時期は「大友(源)義鎮」としてである。

因みに義鎮時代は、約22年4ヶ月間。宗麟時代は約14年6ヶ月間。あとは三非斎・円斎・府蘭・宗滴など約9年間弱である。

大友義鎮(よししげ)

享禄3(1530)年～天正15(1587)年
豊後大友家第21代当主
法名「宗麟」



左と下の絵も宗麟像



ハザート・コルネリウス(1617～90年) 後姿が宗麟
『全世界の教会史』 Coninck van BVNGO

◆従来、キリシタン大名「大友宗麟」として知られているが、それは晩年の印象で捉えられることになり、負のイメージが付きまとう。

◆若い「義鎮」期の諸活動とその重要性

10歳、元服

15～18歳、父義鑑による大名館や大名蔵の大規模建設事業

21歳、家督相続騒動による父殺害（人生最初の衝撃事件）

22歳、フランシスコ・ザビエルと面会

27歳、倭寇禁圧要請の大明副使蔣洲を館で接待・会合帰国時、弟大内義長とともに「日本国王」遣明使を派遣

30歳、室町幕府からの守護職が6カ国に拡大。九州全体の統轄者「九州探題職」にも補任、永禄5(1562)年(33歳)の入道(「宗麟」)後においても...

外国王との正式な外交国書では「源義鎮」を名乗る

◆そして最も悩ましいのは、現在においてもマイナスイメージが再生産され継続されていることである。マスコミで活躍しているH教授は私の知人でもあるが、江戸時代の野史を鵜呑みにして宗麟を面白おかしくし表現、これが結構評判を呼んでいるらしい。素人には脚色と史実の見分けは難しく、誤った宗麟像が今も増幅されている。由々しきことだ。

歴史学界(日本史研究者)のなかでの危機感と対応

三鬼 清一郎氏(名大名誉教授)

「かつては所内出版物を同僚が点検して内容を確認し、**相互批判・自己批判の原則**が自然の形で貫かれていた.....。

たとえば、麗々しく「東大史料編纂所教授」という肩書を掲げて、テーマの如何にかかわらずテレビ・ラジオに出まくっている人がいる。当人の自由であるとはいえ、**肩書きは権威と誤認され、発言のすべてが正しいと受け取られかねない**から、それが当人の思索や研究成果に基づくものか、思いつきや受け売りであるかは厳密に検証されるべきであろう。何よりも、本務として携わった編纂物が、学界の水準にてらして遜色のない内容であるか否かの確認は絶対に必要である。.....史料編纂所は、長い伝統のなかで培われた名誉と信頼を保持するためにも、このような状態を放置・黙認せず、責任をもって対処されることを祈るのみである。

※上記はスライド画面を転載したもの。鹿毛敏夫が言いたいことが凝縮されている。

◎パネルディスカッション／「私が推す大友氏ゆかりの地」のテーマで各自が発表した。※敬称略

鹿毛敏夫は大友氏発祥の地・小田原の大友郷。京都大徳寺の瑞峯院に関わる庭や襖絵。府内の町の三層構造。「木碎の注文(設計仕様書)」による2階建ての楼閣説明。臼杵の戦略的地理の重要性を報告した。



牧達夫は、能直の母・川場姫(利根局)の出生地・群馬利根郡は能直の故郷とも言え、7代氏泰・8代氏時は先祖を弔うため吉祥寺を現地に創建した。また、宗麟は臼杵の樹林寺で得度(出家)した。廃寺だったこの寺を先年関係者で再興した。さらに宗麟は、博多経営にも心血を注ぎ、櫛田神社の祭礼や博多を流れる御笠川にその名残を見せる。

青龍山 吉祥寺 (群馬県利根郡川場)

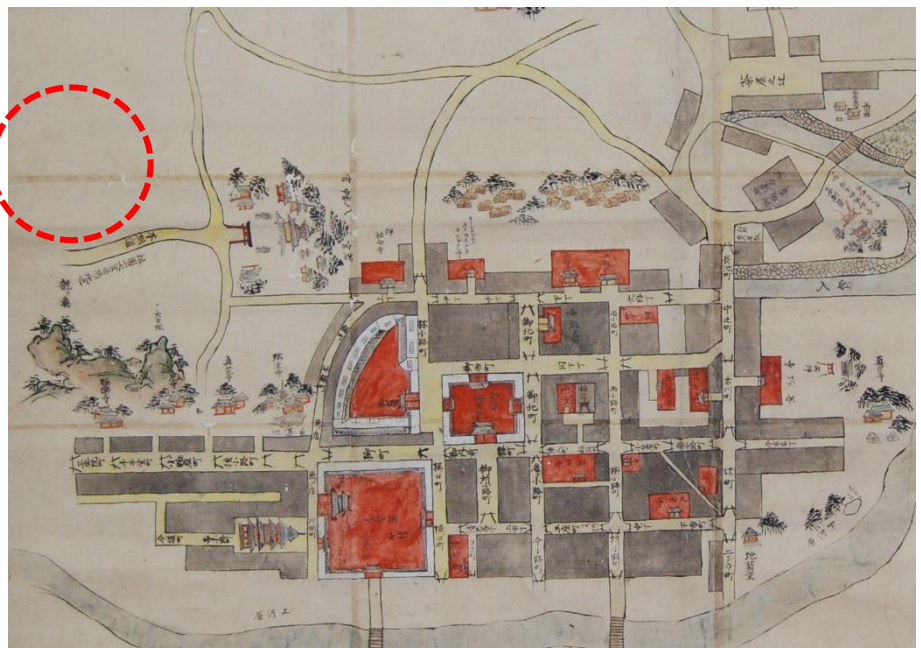
櫛田神社(福岡市博多区)

【吉祥寺山門】

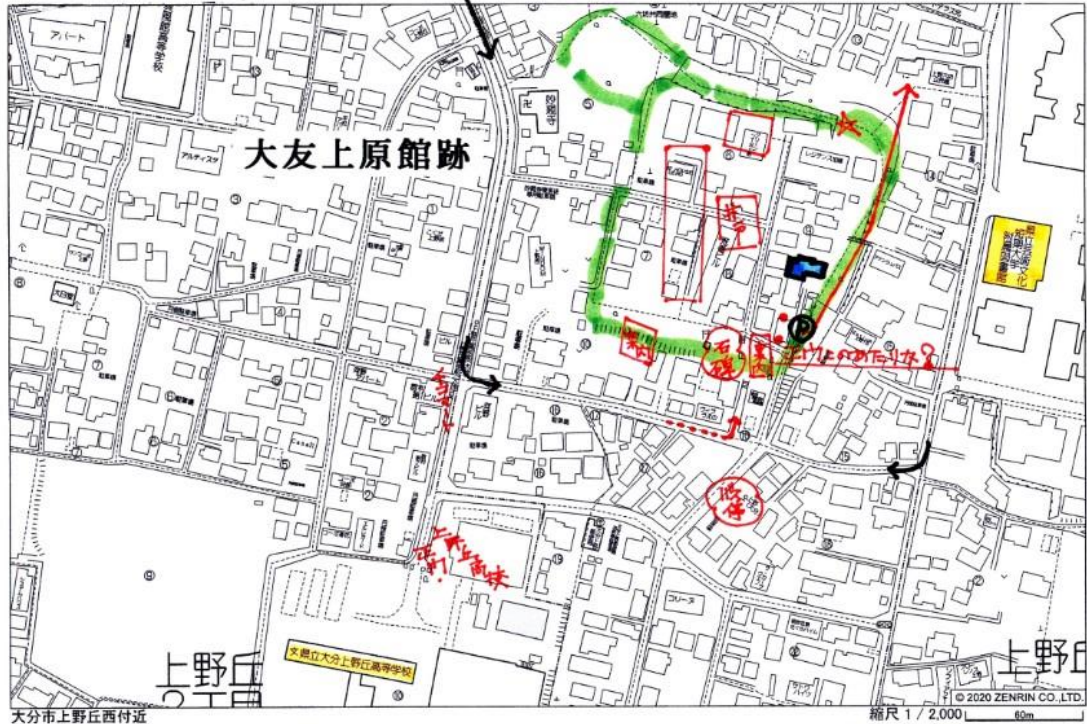


若杉孝宏は、府内発祥時の勝津留と高国府の関係や上原館が同時代の野史の記述にあるが府内古図に描かれていない問題を指摘。宗麟が豊後以外に出陣した高良山を拠点に、対竜造寺と対毛利との肥前・筑前の争奪戦。さらに日向高城戦での敗北の原因などを述べた。

この辺りに上原館が描かれていなければならぬ。



佐藤弘俊は、自宅がある上原館跡地の思い入れを図面と写真を駆使して説明。二階崩れの変自体よりも遺跡としての価値を語り、ぜひ訪問して宗麟やその家臣団のことを偲んでいただきたい。駐車場が不便につき 2、3 人なら自宅の空き地を提供したいと熱っぽく語った。また、高橋紹運の岩屋城跡や柳川・御花を研修バスツアーでの訪問は貴重だったと述べた。



入場総数／120名（入場無料）。会場入り口でコロナ感染防止のため、消毒と検温をお願いし、念のために記名をお願いした。

評価／参加した一般のある女性は「今まで知らなかった大友宗麟像を知ることができた」。さっそく鹿毛敏夫著の『大友義鎮』を申し込んだという。

今回はスライド(パワーポイント)を多用し飽きはなかったが、項目が多すぎて時間の関係で説明不足の感もあったようだ。結局何が印象に残ったか自信がないという参加者もあった。

また、時間的には長すぎず短か過ぎずちょうど良かったとの意見も聞かれた。

今後はテーマをもう少し絞り込んで深く掘り下げたいとの思いがあるが、一般の参加者にそこまでの関心があるか、という問題もあり、課題としたい。



上：10月29日作家赤神諒氏の講演「作家から見た宗麟公10大事件」（於：ホルトホール大分）

下：11月7日：大友氏顕彰フォーラム in 大分（於：トキハ会館5回ローズの間）

